平家物語　十三

伊
1760
11

呉雅田
図書

門 別 号

平家物語巻第十三

六月三日法皇さん上ゐより寺へ御幸ありて山

しか寺にては大きう被遂旅行度参宮か

とてこきる屋まよしきてこえあり

去二月廿八日城四郎長茂当国廿七郡出羽

まそりよ伊まて加え紀の勢のかさせさき

さんと雑人ましまよりわかて六万余

騎とそ云ける上野の国へむかんとせ

うたれける先業限ありけることこそきこえし
雑兵をもよほしてうち向六万余騎を三方
よりむかふ筑摩越にハ浜小平太伴太郎
大将として一万余騎をさしむけらる植
田越にハ津浦左衛門大夫宗親一万余騎を差
さしむけらる大手ハ堀口殿を大将軍
にて四万余騎縁をめぐらして越後国府に
つきにけり明日志かのへこゝろさしける所に陣

わらそふ搦手ハ様されそ笠原宗文乃
錦平四郎富樫三郎閑妻六郎風間高橋又家
子にハ三河次郎渋谷三郎先さうし九太郎
将軍三郎らうとうにハ杉津宗清房そのこ
平新太夫奥山にいらんとす中条新太夫坂
東別当里見當国ちかくとわらそひ筆
を堀口郎流きさうらせき嵩しとて以上
以上もわらそへ出して四万余騎とうけ

して家乃ゆへにちかこえて筑戸河よこ
田原広まちんをとる隆四郎ハあんもいそ
文しせくここゆる木曽をみるやとそや
菊る木曽こま返ててつえ掲をめしけるふ
志か乃上野安国よりたせ戸いるといふ源
それ乃鎌千稜よ八すえさりけ里尚書の内
志かとり河原よちんをとる楠六郎中ける
八親忠よいと海を保くへし横田河原ほとり

むかしむく隆四郎の鎌みてまいらしとそや
けるこ乃後志ろ包しとてちかくをはらハ
もちかせ乃里へけ里わひて白馬河
菊を打いそく檀尾さま入河中をせ中さく
え河こを八隆四郎の方よりよこ田志乃くね
石河さまふハ此方をうなく越さいしハ親忠こ
もをみてく大本堂よえをとせくるよりを里
てかふとをぬさき八幡文をえいして南無阿弥

頂礼八幡大ほさつこんけんの御せんには本宮
のかくら始まる十六人八乙女八人神楽男を
なして神領をきしんしてそ下つかんそ
いのりける親忠後系して云くより筋
も八八幡宮の跡ゐさんよりてや拙とも
てひらめく御西まさく秋落おかなれの水
本堂よろせつらく新書を八幡にをさめつ
まれりかうら池なるに御下四郎桃井丈

郎きなれは八本宮六郎佐井七郎根津次郎
海野大平四郎小室太郎望月次郎同三郎
志賀七郎同八郎禰津太郎同次郎野沢太
郎香沢次郎千野太郎諏方次郎手塚別当
手塚太郎そのそのほかなゐまうけ八人く
うらみをかうしてけるさう後なる八郎高
のまうゐをくらくらそむくとのきのまか
けはとそいまれなることのはなりけんなる

とて百三歳せいゐをたもちなかへく一こも
さりしにちくま河をさしてたちかへる此のは
とみなとよりきこえたちあかりてうし
ろへはとこをまし又初めあらしてみなそへけ
とをり給り城甲府十日町よりけ風かれ
さることそうちあけゝこえんと歳ふりしい
くわんをんとわやうくて笠原れ年め
ぞま孫にそいひけるハ姥といよの尾にくや

ふり給ふるしてそうちそしけまこえける
といひ給して笠原年めけるハ孫出ん
孫ん又十まなりけ然大小事かつたんまか
六度あひぬましと恙ふく治るまつるも出我
かあくあさんに入滞りんとく百餘ハりれ
縁あひてて河をさしかうしてなかりける
八十歳迄在人にちいへとくいかくあさんを然ハ
まくなし女こうれ歎ならもおゝくハさこえん

笠原頼直かよ紀のこころよしとて木曽殿
兵者さんに入もとよかりて合戦なるまじ
きまてかうつ兵者あり一あつまり人々
三百騎ハかりの勢いてく笠原の勢ル中へ
かけ入くさんくよ戦うハかり勇者の流れ
掛ともめ戦すまし決定りこる人へ東西へさ
と見えてかれさまよかるハ落つる三百余騎ル
勢ハ五十余騎よ遂んなされし笠原の一百騎落

勢ハ五十七騎うちもてく乃ち四十三騎よな
りふかり大将軍乃まへよのりかう来よなかり
て馬よりおりてかりせん者やうしうくれらん
きらもつるそと中せハ樋口次郎こまとかへし
てれ色ん落高成いまふるしめ無事にれ
体くよんなるハ嘆取いさてしれ掛るとて
礼く義のふまうること急なれハすしける
しそおのれ入まと木曽殿よりハ高名なるのと

とのこりもくかくうまて御とりぬ所に
にありけくわるところに佐井七郎か十よ
きふくちく海をうけたる龍をとれ
よろひにあふはしたんかふとをそへてくまなめの
ほろかけくあつらしけなるむまに向ふてまん
のらそをいてのりたりけりこまをみて陣
四郎か前より富部三郎十三きにてわれ
下揚いてかり富部ハ萌黄威のよろひに

くろくうちたるかふとをしめてあひ
廿八の矢さしたりけるもんちんわしける馬
にきんふくりんのくらをいてそのりたりける
のれたりけるにちよりあかりてあかくさしきりの
信濃住人富部三郎家俊となのるを
佐井七郎ありとにけまいらせてハさみ合
弘資にハわかくぬかしこさんなれこそて女
杵らんこのをも平家ね門うちて茂栈

あはし縁友左衛郷の八代の末忠三北国
住人依井七郎弘資となのりけれ富部
三郎とりあへもわさみハ次のかうらによ
まんとおもひしかハ家後の為なと八なふと
ありくきて婦ろとよこ速なのうちてあハ
富部三郎八いかはのことなきなま速八なこ田れ
いくさよ依井七郎よこうて行て在乃まて
くへさそてわりなるうとく人なといそん末まて八時

なるそとよりさみやしのふこ弟高羽院の
上小田よおし下野公清大夫正弘の嫡子
在應の大夫政弘とて緑左衛門まん乃母
新院方依前よそれ加川さんつまて日まうり
しその史人よ奥州よおさ行くれのみよ富
部三郎家後とて源平家末孫よ付ともに
さうらへ次のんち侯しそこさうらひ女房まさ
な記おの一族ことそ々子といひまさて淀十

三さい所に成なりへく祐成ゟ又十より此
最中をかぎり母かうしろへ流れ出節く
八丈とて御しきてそさ候ふこさ母りさん
さんまかく祐成七郎かりてもかうしも母
たりしかり祐成又十三さい八十三さいよりう
あさましきよ箱王は十三さい八四さいにふなれ
祐成八郎をまいらせしくこさせ給ふ人々はゝ
あま人ありなんとも思しくありそうも箱王は八

天下のまれしことをいはせられし思く祐成
も箱王を抱きしよ関せう弟くとりまゐらせ
まいらふさうしむへくまんくとし給ふことに
いはれこらうとうなしへそくしけ給は
く候さりけり母方あしめさてかやうに程
まわりここらされたる御しもうさまよりけり
思ひくとなりて大ねんとひらく旅志
ありさりけり箱王三郎いくさまをつまし

かゝる人々にてわかきこゝろにかけゝれは入道祐経
十郎にはひとつはよりに祐経に恨をもち
世をはゞかりわかすさうしわらはく曽我殿をそうらひ
語やとて兄さまなりそく曽我二郎かはうし
うに梶原小源太といふ死生不知
後をはかりみるのかとさらにかんたうせられ
く思ひこれにふのもめくせさりけるかなかりと
城四郎に仕へかい小次郎祐経えなかんかう記

一きうらとそてかんにうゆるさまんとあとひく
まらぬかりけるかいくさありとまうしていうに
五郎まいりて曽我殿とのへは後くはそとにし
かれそおそこよくおもいま祐経七郎となく
ひけるそうなとかへけれとかうせおは
くおかいくに五郎へくみまいらせ兄もみつき
ま死ぬ事ともさうしまいらせくみえせやう
たりれるとは乃くともみくそこえへ五郎に

まく上野沢井七郎殿とこそうけ給はれ
葛飾殿らうとう梓沢小源太宗光申
ものゝせいいくさよりはさまは沢沢らひよりて
いくさふたつまでくはそやその御せいすゝみ
つゝ八重若殿のほどとも川上一とまかりいて
ゆやとてまいりくりのこ勝ともひゐる沢ひ
よむかひしてまつまうて御馬車中へゆとひ
若者八わうまれ御川よハゝかりしとおもひく

ふちをわたくゐる宗光八馬をはなち沢
沢井七郎はや馬をよりわたしにて
えうりさゐもちらんりなるともえらん中に
おひつかくを勝なるへくこそとうゆわら
こわと宗光ハきこゆる大ちうゐをさそ
わりなる八沢井七郎をとてわたへくよき
をく水をさかしをこらて後よくより宗光をを
くさ此者ども川をわかふせ若者らる乃流の

うるせこそりおもしてゝこれ君くなよなし庭
をこさくかくゝ中けるを宰相しそ月筆
さく人君さんかんよまておほ月らなさ
宰相をかんこうちらまてくゝつましとをこても
あやまし給えんすゝへちわこ数人月けり
きましくい波月いましとい給まし給え人事ら
そらしくへきこうんとのいくさまよ給こさ
うらとてけり人こう袖ゆるさましら人とそおもへ

給ゆふかく見なしまいて筋給しそかゝりしまし
宰相給をへましうまし人かちよこそうこれ
さまふ御まよをくまいりくうましさ筋
たちいしるそくらそり候ましうりなる涙
ゆきき君給み郎かくい共ちてちより
て御身てあいをは御をくこへさとこまへ月
て二のくえを見奉りみこ君まよさうおぼ
くうこときみるこをかまをみこまへ給ませ

扇敵者によらなく蜀敵こと度ハうつまし
経然蜀敵為まいこと敵するに将劉小源太重光
去りのちこ男を八ふくしそうて庭にをそとあ
敷その附仇寺七郎か家にありしとき之
十七さおわいくらく重光二乃念ひとむと
むかは帰くと川第につ津く馬にむこたれ
里くこらをぬき中にわを入くさんくに
うつひこ字をおもしけるハ胡人に生らり

鴉毎垂に鬼なるとそおそれけるにこ此史に
こさうらとそうしろへさといてよ帯りおいらく
敷きのこそなりぬ後そのとき重光かる
ハらこさも此ろこさも此ろへをよ此おゐよれかる庭
武男おう猿え去り丸とあとるそやさてら
者さ此を仰よめくこそさ清よ此が然か
まとく去るのくぬりこまとみくそしまる叔拍そ
みかりなきま其そ字きを尽くわか猿けの庭

つかはさるほとのこのみ年さわかハ一万三千か
さむらひともおりてハあハもましくそ候はま
かくる城四郎ハ五勝に候ともみなうむ
しやまそし手勢の地ハちくなし木曽ハ只
今屋家勢なりともわか氏ハ源氏先来義家
のむさえとしてる家思つゝさる郎党ともを
従ハつゝ同心にいまうくぬくひとりこか
のあんしよ并九郎光盛としてよいさ

給て義経を始めわり内ニ平家中なるハ大手に
おいてハ手勢さて手利家打めてはりて
ハ光盛より傍へ手へ利わいのせうしやま
あれそ平家の方へゆきてにハうふあるへき
候ハりてわか領よりつあくへ源氏か家之石
まさ城を立てうけ山義木曽にまゐらみ
てわか屋しきをなしわまハいふともいひなき
ハ光盛ハ花より家屋へさくしうへそまる

扇を投とれ給へさまし給のきていかゞ給らん
しく〳〵ちくま河わたりこを世寅よしな
く城四郎の後陣へそわゆまをり木曽
知しけるハ井上りやうけむかひけれは
あくてよし絆ひゝてわか勢くりけむける
う一きこも七とくるわかの党とりてむかふよの
そし給てまりとよまは猶四郎ハ井上か手え
させんつ弟くむら給くは流かうしける津波の

同宗親の勝ところ扇くゐさへハあはれ
そうき給ハむかへそとはかなをとそ知けむと
ようはそうきりをしてちくま河をさしはし
てかくこさ衆ちんのまへようちあるかのちん
のまへは大なるはかり給のさ二丈ばかり
やき生きうし刃のすゝ何里をこえむるへ
のあさはとひはうひはへ給くはつるゑのあ
里はりみそこは御所ゑのもありをけり

こゑにて孫八わかれさりかゝりすてあらき
きさしわかく中なるハ佐藤入道秋義会
弟かとんの三郎秋季か子息隠岐守光明
孫わきハ藤次郎光氏か末孫信濃守乃
従人井上九郎光盛かくさきをハかけたまひ
在り様とて三百よ紀馬をしたかへてかへさ
さきりみなミへかけとをる大手の勢二千よ紀
またうしろより小へかけとをるかゝやかし大手の勢

とてあしく七よりハありけるハ織田部
か大勢四方へかけちらされて雲かくれ
まかけなきまゝ立寄茶ハうらきまかりはく
秋扇ハ加藤かはよそをこみなる高景
人も水よれをまちく立かへかり大将軍諸四
郎盛氏もあしわか勢をつくへかなりかも
蔵ハこらへかねて越後へ落ちつきそくはよ
眺かたてるや人へハ見かよ身おつる人をりまさ紀

よみかへる事様は平家平氏出世もすま
くるしみなるいのちはきえさくりしは世に生き
子孫にまつへくもさのむまし紀重越
後武者某方人なりし人との大将かく八木
曽七八生ともかえし川宿りつる時に伊勢
山るまゝもうへん忠言先ぶ様とて出羽
国へそおもふよりる木曽様国のいくさり切か
なるとて入来ひて百よ人なりし府深田にい

證によつゝく越後国府に流さる後の事乃
ことのともみな源氏によるとはゝの城四
郎安端志らさりしを八合はへおちよく
小諸にて七ヶ国の兵はみなまで向の事にて尽く
きこりふとりうし様くそ越後国よりは輪
は新介安房木平泉なる其異朝の威儀師が
加賀国には林富樫井上津幡能登国には土田
のことのまゝ越中国には野尻石黒宮崎流巻

右府に是に安からぬよ牒状をつかはしてけり
けれは木曾殿にて城四郎かしこまつて越後
国勢につけて都先上くは兵をいさや
心さしわる風うしてやさましよりけん
と〳〵しかるはいなりしとくかはなく
まいては木曾義く信濃一国をこそ給
かりけれはさてこそ又百よ兄ようりよけれ
さうこ光く平家ねうしまてつまいすん第

く絶越前国火打城をこしらへく籠人
と平知しめさてけの男八之字北へ向りく
よこ田城にて候ける七月十四日改元あり
て養和元年とそ申ける八月三日肥後守貞
能鎮西へ下向す大宰少貳大藏種直か謀
叛きこえけるによつて其追討也
九月度驪まて大仁王会被行承平将門か
乱逆の時の例を尋て是被行例とそ聞えし

ゑしその次鎮縄寒寧郡殺文せら紀て
去りしかるに紀元ゑしらんと思さ治
承ことさこゝを大文月源国小城四郎長茂
彼国ちよ彼成国先城太郎資長去二月廿五日
他界間長茂住国ちて奥州住人藤原秀衡
彼国まで彼住安国とも小以ね木曾義仲ね追
討せよとそきこゆ書よハ彼裁ちりてまゝと越
後国ハ木曾押領して長茂せおいやうすとハ

国務おもおよそなりあり
九六月中宮亮通盛朝臣ち越前以下小
国へ下向して木曾義仲を追討の事ハ城四
郎長茂ニ相勝つをこゝまでとゝみゆえう
流りハて友兵九月九日越後国に下て源氏
と合戦も平家流ねよおいおとされよ
ありかゝりけれハ木八月右馬助経盛さん
月にも又軍兵数千そをそへして

越後国へなかされしを召かへされ此比いのりをし
ならはれける例をまねられ法性寺
神領をよせられ神祇官人諸社司本
宮本社まてをのく御きとうし流
よりおこなはるる諸社まての諸僧諸社
まて調伏の法をおこなはる天台座主明雲
僧正は揺波殿の御所にして根本中堂にて
七仏薬師法をおこなはる薗城寺の円

恵法親王は新宰相泰通卿にて金堂
まて北斗尊星王法をおこなはる仁和寺
守覚法親王は九条大納言有盛卿亭にて
孔雀法を被行ける法務勅宣を承て禾
勧大元如意輪法善覚延命大熾盛光法小
いふ百まてをのく肝膽をくたきおこなはれ
まかり院御所にては又壇の法をおこなはれまし
中壇の大阿闍梨は房覚前大僧正降三世

乃壇ハ出雲権現正軍荼利ハ愛宕権大
現の大威徳ハ公服大明神金剛夜叉ハ胡慮
明神ホなりくよ忠勤丹精をいたしてお
こなへる逆臣いかてかさかんとそ申ける
又日吉社にて誅殺のよりらを調伏のこゝろ
にて壇の法を三七日始行しに初七日為
中文日にわかりく降三世為大阿闍梨光
算法印下大将軍の枕屏にて寝死にけり
なり神明三宝も皆納受ありけるにこそ
また揭焉又調伏逆討の法をおこなく大元
法をおこなハれける安祥寺実厳阿
闍梨大元の法を修しけるに被行ハあるにこ
ろに平家追討の法行ひたりけるに
うわさもなく生にさいはひをとけられしに
頭にけりハ調伏を調伏のうち被宣下
首高師ハ神を示ゆり此来て調伏にハ

君ゝ道乃平氏を調伏せしむ只わかれ
色ゝやとそやける平家こ乃手代ハ尽
とりて浮沈源氏にやかてかたへ人ない
うせへこと清盛わり条道とも太政大臣劇
にくなき心ちなくやこれ恐しける中に平家ハ
うれく源氏乃世となりてハ源氏大き
まかんして大きいをそうさんを清閑こより
れゝんわりて去勤貢よ摂津助になされ

よりて又廿七日に神祇官にて非常副
幣を廿一社にたてまつる十四日職事甲
冑波大神宮へまいりて月次にしてしも天慶に
将門を追討せし時は乃例に職のよろひを
とをそそまつられける去寿永元年十
二月廿一日若宮上皇附殿によりて人
とゝもそのまへいとそこえし清つかい神
祇権少副大中臣定隆ことをつとむ又祭

主もおはしまして下向せ同七日河陽離宮
院に下著せ中綱はりに天井より一天
四方すえりかゝるならかておもくまく
定證かたかりれ神器件へたへへよまかりゆ
剣しとおもひく神璽をかゝえたまはるともみせ
龍をいらて上衣をぬきさせてすとつを
刀をきとも君をも婦しきうかとくさて屋
三然おりふし人くわきこりわれかく酒

をのをりふしなふ此なく同じ事によなり
さてその程蔵らし此海ばかりに定隆孫
へなくらすし第ふいうめぬことの文采主
いふくとおとろへしけれともおとろへ次
すこふいきもくかてたえことハついたり
ほうふかさいうしけることハ定隆屋光
なりとて父兵衆主いふふなりぬさるほとふ
彼兵仲條よこそのうけへ事けれハ大夫同

祐成かさねにて友治従五位下左衛門
をつかりて次男に御参となりたり以
外祖は大伴宿禰とて源氏追討の法い
乃里わりけるに宮下に雷電神を法成六
里を見られいらん尾張源頼朝は国を望
遣へしやと御く座りけるを源氏頼は忠
御まいらり宣命は乎記事くかく例なれ
に継とは書おやまいらしこまをもさるへき

失錯なり頼朝字は資くとふよきおもき
源をとかくとおもひいり給も給はぬ家
は方へするものはなからまほしよほかにある
にそおやしくまさ猿を神明も之實を流
納言なしといふ獨字也
十二月二日源家になりしは大尊舎之
おこ所つまして大尊舎は天武天皇の御母
よりえしまいりて七月御所に御所従おもき

えたのうし内におこなはるゝ事なきとも
去年ハ遷都ありておりしかハ新都にてか
なふへくもなかりけれハさまてハ評定
ありて又荒たりける巻とくおこなはれ
くれぬふおこなはれとも年又諒闇な
きハさうゐもおよハす大嘗会延引先例多
平城天皇の御時大同二年御禊ありて十一
月に大嘗会おこなはるへかりしを去かく

によりて同三年十月に御禊ありて十一月
にとけおこなはるゝ嵯峨天皇御宇同四年
大嘗会あるへかりけるを平城文と乃年
らるしに延引して流めのとし弘仁元年
十一月にそおこなはれける朱雀院の御
時も承平元年七月十九日宇多院う崩
させ給ひしかハ乃翌年になり三条院御
寛弘八年十月廿四日冷泉院御事あり

よそおこなはせすつねのとしよりはえ度よ
そおこなはれし御ゆきのとしまでのあはる
別ハわりなき人とも二ケ度延引発倒して
いましこそおほえせを度新抄まて世の
ところなきにしかハちのちおほえ次大臣
殿常楽院ハいまこ流なりにさせ三条院
御所あ別よ月の節く大波友融まておこ
なえる屋なり法勝より天下諒闇まさに延引

う人ハ已にくれさいよおほえ次二ケ度まて
乃あそひゆるとしけるみ年ゆへしこへ
おほしみやりけり
十二月三日皇嘉門女院うせさせ給ひぬ
御とし六十一これハ法性寺禅定殿下
乃御娘崇徳院后院讃州へうつらせ給ひ
しくし時落飾捨思ひいりさせたりけん
思ひるまてそおほえ待まし命くさりあはれ御

事まて世にハ志なき然なれハ尼にて法お
ほえありて一向後生をねかひけれハとかくよ
まかせぬ此事かなしまさりけるハ院の御
ほさいふ貴とも成給ふ御禅尼も
うちおきなきいたはりを御ほんさき
ましくさいこ後ありさめてそくれ
に夫寄あり御長和識にハ大宗来迎院乃
本成原様数とそきこえしむかしの乃おかあり

とて乃この給ふまへほとおかんさかつき
なり同六月ハ然るへくありよ御座え
快法親王に給はせしまへ然るに八鳥羽院
の第七の宮にて御給御とし四十八とそ
きこえし十三日院御年ことしありしに
十人殿上人四十人供奉しくるまに
まそほきまゐらせわりけるを給ひ
し法性寺殿御所をこほちて千部法寺に

うこりくよ流くまつり女院方にすへてなしつ度
月いり踏くおほしめせと海までそひて世
こまかなりける
養和二年壬寅改元ありて寿永元年とぞ申し
月一日除目おこなはれて宮舎もかこみれ者
十六日諸寺院舎もあり萬常法藤月
しるましてわ結構云々
二月廿三日犯太納帰星二并変也天文
要録云大納犯帰星大将軍失其職又云四
夷来為兵乱事以之思四月十四日前権少僧
都顕真貴賤上下をすゝめて日吉社にて如
法に法華経一万部を転読せられける
法皇御結縁のために御幸なりけり何者
のよ明にいひ出したりけるにや山門
大衆法皇を承りて平家をせめんと沙汰す
るとこそきこえしか平家の人々驚合て六

波羅へ移ありけれは京中老貴賤上
よしわへ思軍兵内裏へ移りけりく
四方志ちんを守る十文目甲三條中納
言弟朝御大将として三千余騎
友兵をわたして日吉社へ差向
山上ニ八文庭流源氏ともかしく小国
へうふよし年來りにて山門追討の
ふれニ軍兵をそて東坂へ向

報ときあえ共もえ大衆そへりて大丈
門横たん所ニ三塔會合をなしけれは
山上洛陽さりとも思ひてし事なの
絶なしも法皇大ニおとろき移ありけし
て法住寺殿上人々をそしたへ里小
西蔵呂ともかの中ニ八葉水を流く天蔵
毛わりかわ池上ハ山風くなりとていそ成
還御なり然三井寺たんこと屈り宮徳近ニ

てんとりふて中月まてくたるにあり
海ともには大衆平家を婦人とふくまれ
し平家又山門を追討婦人とふ出雲も
なしいまいらせて給ふはなき事とも也
堂衆人は天くあれ候りし御孫縁より
ちよ清しつかくたこわらはれ物語といひ
れいにましとも清しさたんとそおりし
第教

又月乃四日淡路水戸二拾(?)年擧(?)浪にこ
て破る飢饉疫病によりて也九月四日太大
將宗盛大納言に還任して十月三日內
大臣になり給ふ大納言の上臈女人をも
に武中小も後地大なる大將實定一之大
納言にて花山英雄文武儀也して所在ま
まあり大將居母といひくいひ二ヶ度
まて御ら置くあひしりそ出来んなりしら

七月兵杖を給りけん然十二月賀茂あり
行幸家継家其公卿十二人扈従花人は
下殿上人十六人前駈を承むかしとかん
めんよこそうめ兄へまひしらへ八月めうの兵ねそ
そありける東西北南源氏たちれたく
よおもひまかひてきていま猪先乃源經人と
是非よ浪のうへ風人流かに寅屋經ん
とおて浪をそ風つなる事のこあるもいふらひ

おくり見えしかく花色かなる事八おもと
とも世家かの兵をもて志川月經も前經ふ
願書大衆四国九国其紀伊人熊野金峯山
乃備後伊勢大神宮其外友文人よりたまひて
ことく平家をそむきて源氏よこころを
かよはす四方よ宣旨をくたし院宣人院
宣をくださるとも人ともに宣旨も院宣もみ
な平家の下知とのこなへたまはぬ八ことさらんは浅

く揃一人もなかりけり廿一日大嘗會御禊
三条 りき 十一月廿日大嘗會ゑに波行わくく 丹波
ろしもとさ無
貞永二年正月一日最会以下つ孫恙こし
三月八条殿恙拝礼ありしに胡よりにえふ
さうこありけり鷹司殿恙関白とや建礼門院
右六波羅恙泉殿よりて移し召ふその出前
まゐく筆ありけ次右左中将清経朝臣公

四九人同大臣宗盛平大納言時忠按察使
頼盛平中納言教盛新中納言知盛修理大
夫経盛三位経俗従清宗三位中将重衡新三
位中将維盛殿上人十三人治部卿光右大弁
親宗朝臣右中将隆房朝臣右中将資盛朝
臣薩摩守忠度朝臣但馬守經正朝臣右中
将清経朝臣勘解由次官親宗右馬頭行盛
八条殿恙渉方よりの有礼也八渉せしとの九條

門督中納言基家の女なり皇后宮の母后に准后
宣下ハ称礼ありけり八条殿と拝礼さし
ゐてくそ御生れ二条院大夫よりも西門
院母后に後准后宣下ありとも源礼なるに御座
東一小条院記天下をしろしめし世にをよ
む極楽わいまは入寂やとて寿永入道
成就ハ中宮ならしや世にとの宣にをとし山
に錦后に入とてもありけるに位第く八条く

のころ申されけるよりはかく人に出家ありけり
二月二日當今はじめて朝覲行幸ありて院御所
遂あり上皇院御所へ行幸ありて高陽院に家
まで朝覲行幸ありそのまゝいありて二月御忌
月なれば四月に御所にて建礼門院御産
ありとさゝこと新中納言の常格数新なり
けるが女院の御産とあそばしけり平大納言
時忠の卿の兄に新中納言知盛とありし

三位なれさまよりかう三月廿八日夜更て同
門おもとして二枝来四月七日より北国へ
発向して木曽義仲を追討とあり
廿六日宗盛公従一位に叙せらる廿七日内
大臣を辞中宮大夫をも御許なし只定任
までの官なりとゝ也八条高倉の亭にこ
もとおり平大納言時忠卿按察大納言にて
盛にて新中納言知盛にて左三位中将重衡
にて右大辨ちかむね朝臣ら御前ありけれども
ほかの人ハ入ざりけり
去比より兵衛佐と木曽冠者と不和なる
によて木曽をうつべしとてその使に兵衛
佐ハ先陣を遣しとて相模国鎌倉よ
住を御文十郎蔵人行家ハ大波入道志康
将まうてしとか川弟く東へおり居より
けるよ大庭三郎なてとして作まうり与

ありけれ相模国松田御所にぞおはしける
所領一所もなき事ハ年譜日記を追捕
し勘討沙汰をして世をもちありけれ
此将家上洛流れけるへしいひ流からしあれと
将家は代々として美濃国志賀溪へおふ
事十一ヶ度也八ヶ度ハうちく三ヶ度ハまけ
然子息をもって先として家子郎等とも
おかくらり只そまし然その時若紀中へかり

なし其一ヶ国おかけ若へまいくこまいる善
書さんとそう絶ありけれ上洛流れたよ
里をかいらる此事おわりそれ状よいたく木
當冠者ハ信濃三ヶ國攻国乃将をもって小
陰乃七ヶ国をうちとりてまもてよ九ヶ国息し
まなりて此也頼朝ハ叫りヶ六ヶ国まてそう
ちさうへく此御分限ともいえ乃国をう
えんとも御分まてこそ此ハ先院内よりも有

毎頼朝ハ文覚かゝく国府をへこなへこふ房し
とくふ卿をもかりかりけるをとありおほせハ
行家ハ平家をほろほさんとて世にあらん事を
まもりし木曽をまねきんとく千騎を将
にて信濃へ越にけり兵衛佐殿ニよりて
十郎蔵人ハいそんてまつりて木曽を頼
朝を将ゆんとありふこゝろ清盛をもおそ
れまし思ひにはいそぎ木曽殿ゝんとそ思

ひるおりからしかいありし武田の五郎信光共
米流また中あれハ志たのまう次郎の共
また六月に越後城四郎長茂をせうおほし
てよりこれらに小滝にを發係してその勢
うんのらし氣悪れおろをうけはさて
平家なむこになりく源氏をせらしてそてま
つんとまるよしうあほつる平家を将
ちんとて京へうちのぼるよしきこゆれ

彼らは八年以前小松内大臣殿女子の十
八になり給ふを御父内大臣殿最愛なる
あまく来客をもこゝよとゝく内ゝ申
しも給らりし給ふるそ其時男君おほ(し)
とゆそうふ小松弟中将殿へ八條大によいそ
十郎蔵人かむさらふよ付くさる云てくまお
るらんとて彼らを兼らく小国へむかえ
人々しおれをその同坂同なり守殿にお

彼色紀わくるあかつ紀をそわるへ相堂
老当いさあ中将殿八條のくまいるはむり
執義頼殿頼朝の小松殿てゝを構えさる母
むかるは今日維之日也明日かつとんと色
しと人ゝ申さる若様は武烈先倒せらん
なたて申けれ宗盛武帝所をらりと
維之日也云なり所願を立てぬて首尾と
まとゝ申して小松殿をうらおもしうりたりい

ろん屋坎田かんとろくりかわろへこん紀
せさんまり玄例也とく おきうり木曽
代よしせさて国中志勇士ともやして越
後国へこゑく越後国と信濃とのさかい
関山と云所よちんとりてさいしくかさめて
其兵共をまちうけゝり其兵共ハ武田太郎
をさきよ立て武蔵上野とうらとより碓井
坂よいくりよ後ハ八ケ国之勢とも越とと

雑しと云勢さなりて十万よ及よかりよ
かりしかとも国の勢横川原にちんをとる
木曽義仲此よしをきゝていくさの勢を
三手よわけて大将軍実かのあり
なしまよ入へし城四郎長茂八十万よ及
ときこえしかとも義仲二千よ及そけちら
らし及さしへ其勢十万よ及とききこ経
もとよりさまての事ハなくとも わし仕為時

義経と義仲と仲あしきハいさゝか平家かたの
恨まてある人しいとしく於落人の平家
ハみな一門かた人とあやしハあやしくあらしハ
あらしくてたよりほんをも安からつまおん
しハあかくれをうらみをあやしとうらみん
ほとよ又平家の世まそなしんと頼ん也
いふなれハ當時義経よて沈こひとゆよ
おようハ涙とて朝さう思り志もの人こえぬなり

又いにしへあらハかく関山をしこと帰らく
越後ちん国府へ入りよりあと當まより
義経はかの文をつかふとその状よいらく
敵ハ源氏の嫡子ちん出家まハ大将人と
あふきしてまつまうし沙ハ次男まハ陣ん
いちこしく平家を亡めんと思ひきうし
あらし出ける纔ハ月のふのをへとりてし沙
と帰あらんとぞまて義経此文をみるた

こそいふもんとく此事なし本宮ここへ〇く
状を法いそ服よハ八幡大ぼさつ出御詫宣
何つり勢入事ふ仲し内よハかわ合の後ちん
御代友と移ゑよし御追討ちよしね
御えん沙中なり内よつ申のよつ申宣を
中なるは伊神を真野神野をよし仲ま
ありかう婦る仲しと詳よかきてり此文を
無法沢かとめきて此事ハ之沢天野房内

無家と義清貫二人を没おとし
て作室りる八本宮沙汰よおかきていはん
ちる所八ちるす平家内よハ遠勅ちる候也
かよハ我沢乃うさ紀也ちゝうをと都羽か
も沢て追討し平家院宣家生涯の天忠
よかうりや其ハ君を殺より其家をかを
ふとこまりて右可有合力しむ一沃ちん後を
わきわざく平家を被同しかし滅家同

寅言をうちまはんとてあまよまゐらせてくま
向山白雪也十六歳人かいはん事よ成り
く粉朔を敵としてまふかさもなく人ハ
歳人をこまし候ふしま人ときまへしか
候りしとハ此候ん君子長浩多さし
華高を粉朔まふん候てなん人とさの
うそふ門弟ん粉朔ハ成人君子をりて孫ハ
か候りまかや如遣をまことをおかとし

さ遣て候てをしまさく勝負をありを
候しとあしふかいふ候しおのくまあくい
え無かいふかあしふふきけとて是之新之
江清須と云雑色をさしなへくつかうし
弓り此事中さんとて凶りむふところ
さい海気水まさりて三日道海を様て吃
こさこえてくはいはようさけてをりて二
人まいけつかい生むく人とす天野歳内よ

うりむかしおりても次第こうしまお
とをす義兵そこともろうくよ都乃まゝう
こゝにてくたくさてふそいそくう
ある木曽殿にて根井小宮乃ちよ
ともをめしわつめく种心まて兼平ちう
見ゑこそ見へうりよくさそこれはう
へきいる乃まもは義兵ともに一同りけるハ
日本国ハ六十余ケ国ともにせりつかた余

り国ハさそそ其んしハうちとつ勝へまいりゑ入
今回十余ケ国ハ南海平家たんまゝまて限
うちわあふてもふる所もなくてかつほと雉
義と御中なるハ勝結び候ハ平家のよ
ろこひまそてそいそんあられ義ハ義ハ下し
ともいたふくうくハ入の清水乃御さう
しをかうにて義兵へわらしまいり勝きせさ
まへうしと申けるハ木曽ともわれとも今井

四郎むまこいひて中ける八おそれける中
事まてもよのくおしく申をへるまふ
梶原兵衛とまれなりける八後日に頭出る
事八おほことの後遂として八法中より其
御しとも御局へらせと何朝光殿をは
悪源太殿をはらまいらせおいて帰え
御尼乃とそれとそおりんはまゐりて悪こふ
義く加田へて殿をおほえて高へ人々小さ留

ふたゝひいくさ八治らんとせんかをせさせては后
ともの随いくよ御かうかのほとをも法らん
梶原しとのひ候まて本当尊をまいて
にこ井八先乃とる也根井小宮八はいか也
めのと子らいわん事まて見らへことまかり留
ことをかりぬをもはさうこめつうそみなんきこ
もてなまいてゝ也て八おしく重なんとそ流
うせをさへ申そとさうそれ八天野遠国を

京景清四郎義實とかや是ハ勇こそ世にあらは
捕ともやおほき記録四郎ハ三浦介かおとく
東國にはおし眼や天地を内ハ白くして
殿ちかさるこのやうに記捕ともなくおとりくり
こまへとて御前へ請し入て本當にとふ
かきさ清くおいてたいめんし是本當中あれ
ハ渉つらぬきのくわへ候し中し入す十郎
義人殿ハ白にて殿ちかへ清きめでたよし御

ふたりめでたき御父ちかよし人に落ちら
あはれにて二念されしあひさき中あなくお
ふ御事をそくまいらせんとそのおくりをとれ
かりかほしほとよくてあるらんしりそそくへ
そまにとてとかくいとかに念らせてふ御ハ存れ
はらまおわえ御方やらしこれとそいそかって
月にいつ場作つくとそいうへんまって場しもとも
中くにて清水寺おこにハおまんてくハなるへ

ともに御はなさせひくまいり給へとくよ
し仲かまいりて宿意やあるへきとくふ
おほしめされくしよし仲一つう人むほん
ゐも御代友まて候へとよく候へく清
えくやさまゐへしとて生年十一になる
清水冠者をよしたかといつしくのきみ子とも
おほしといへともはしめてまうけたる嫡子
参らせ候をよそ子かうとおもひ候へともかへ

かゝる度あん子よきんとこのまゝは清水か涙を
よし仲よ見清水人とおほしくゐく為らにて候を
そむくへからす次をこうしもめいをそむく給
なからハまつまんもるそうこそことつたへ候
頼朝ハ平家をほろほさんといふめんさうしもそ子
ともをせよおつせんかゝやよし仲は取
まこと後ハもそこつゝ何とかりふ度か次
うたひ副かりといふとも果報かくハ実

余にてましくてあまりといふことも果報
わらハおや子共ちからなし一所に
まりわふ屋敷せそここゆえて白うろ
殿原めいせをこうしも安ふ届りすみき
まひ候ハ清水ゆきうしきすの十一尊乃
人なきえこうく死事もしさま次ちれのき
まふ事とまさうめへ海りけりゆんに然もん
りのきまひくたくやわれとのきへゆきそて

のきまいらせ冠者をハ白らせ殿の子よ
ちんとのきまへハとて清うえさまでなりこさ
若君まいらす文君ゝまいる帰しうへ手を
りうく上へしその上へハ皆こそ殿也ちく
御ちんとハ走うしくおりまし山とうあ
こまいりゆまさ帰るをこうしける御ことも
ゆきて○ことも文御ちんにうらまいらせんとそ
こゑてまいらく上せさうはとふかき姉さん人

まておりしまさんするうへたとへしもわれわ
いなそむくならはこそちもんするそとちくれ
ちんも御ゆこれさいこそわきまへそゆへん
あるよこそ身つらかなかれいろちなから
へくまいりくへらんほとのかきさ見んよせさせさ
まいらせとくかきうけ七歳いてをやめれとよ
見ん物をもえはてもけよもこまへみえてはや
あれさんとく後をかさへく見ゆまいりるそ

うかしけれそいら木曾二人召御つまを
まさけれそめく程く旅なきて梅乃らんよ
志なの馬一疋取らせ元をもりこんかとく
中さ搦よしそて清水冠者をそ信のりける
二人旅御つかひとも御さらしてとけさそて
その母りよける清水冠者は八才なりしと
なるさふらい二人うち望月の次郎氏海野
小太郎宗氏といひける物をそつけられける

清水冠者ハみちをうらみなきていけり
かくハわかつきにはふそおさなきとともに
矢先来よりまいりぬるハさはりかねとめを
まさなくと申なきハ義隆とそいひける
ともやさかえみちの草をやわけぬらんおもひこ
なきく地をかりへえといひけれえ
思ふは公の草をもわすれし海老名乃依
稀よそく第え武田太郎信光未着をおさ

みゑく無常けれよさん者んしけるいしの御参
かなし清水冠者を信光もおよひさんかい
なるを未曾けひらくあまよゆなるハ
おすし源氏よくかくハ乃こまふらむもと兒
われふかハ彼いつ陽よ清水冠者よれえ
ちんといひ兒なそおわかりける信光こまを
こそて御をうきをおりひくいふわって来
若殺うしまへよおさんひく無常れよさん

并人さへりけるとなむかよハこさゐえ并り云
清流本蘭に如葉をさそて其本意也と
ともりさこそあるへけれとく清きに冠者
をあはらてもまうつへきさるゐりけり
よし沖ハ本蘭よりゐりくさりぬれよ人
につまとしをよむありめく中なるハ其の
く文ともの月代よ清水冠者をはらし
つるをいかふとつふよ冠者をつきハさぬぬ

ならハかまへて夜うちよせてくいくさあれ
房しいくさあらハよし沖もならび給ひて人
えずハ兄くましわ人ともれ丈くともう
ちしまら左近しさ逢えて世中をあやめ合
て清水冠者を嫡子なれとも兄さえなら
く疑ひけるそとなこまひくこめ此こゝろ
なきとも後をうかゝされなる兄よ人殺
女房とももこまてをこそてわかうこしけなの

御事急かりよおほしめさるゝにや
ちもそてまいらせ候く妻子とものなけきしのひかたき
ことそいはれなく志浦よりもおもひさためし
又ともにはおもひなしてある日月落下
よそましちにもれまいらせしとなけ乃
く歎きをはかきつくるそゝろなる哀とも八
こもれみくはをわかしく悦なり
四月十七日木曽義仲を追討乃ためにとて

友兵等少々へ発向して次東国より責入
るへきよし聞こえ北陸を追討すへきよしきこえ
けり大将軍には権亮三位中将維盛卿越
前三位通盛卿薩摩守忠度参河守知
度朝臣但馬守経正朝臣淡路守清房朝臣
讃岐守維時朝臣刑部大夫広盛大将軍
越中盛俊中務丞盛俊同子息盛俊中判友盛綱
同次郎兵衛盛次上総守忠清同子息六郎

兵部卿宗光同七郎兵部卿源清雅当京夜因
子息大夫判官京官上総判官常陸介内蔵判
官季国官称判官出羽武蔵三郎左衛門尉
孟国以下文領検非違使靭負尉兵部尉有
官等三百四十余人大略数を尽しき之源の
五畿内ハ山城大和摂津河内和泉紀伊国
兵庫兵衛志気此よりはしわ然ら
またり東海道ハ古は東の相模まで

いうさりけ伊賀伊勢志摩尾張三河遠
相模もかくまいりたり東山道ハ近江美濃
飛騨三ケ国志兵衛かくまいりたり北陸道
ハ若狭越前小志者ともに其ニ一人もまいら
ず山陰道ハ丹波丹後但馬因幡伯耆出雲石
見山陽南海西海道四国志者ともハまいら
ざりけり播磨美作備前備中安芸周防長
門並筑前筑後大隅薩摩此国者人々之志

去年此冬より終しわかれめくれ此時いたる此
事なきよつかくも引きんおるをしと内儀
おりかれとも去も去紀夏になりてそう
ちうちなるその世い十万よ紀大将軍六
人もろともの上ふさいた余人先陣後陣を
さうこむれ車をめく思ひよ承さ紀小キす
是なり此鎌よハなおかねてをもへさに
とうちきこさ人なんとそ見えかき道

を給ふ道ハ路次よわたらる所をハ播州一場
家をいたす正税友将といへもあふ坂より
うれひとりけるに猪名のあたりも大津
かうされし津山田屋にてはまて乃たち給ひし
此ふねを志摩津かい川よいたるまて淀川
追捕を人民山野よ逃かくれ侍しを
こさてワりハしかのふわりなりし平泉るも
是安明威儀所を大将として輪津新介安辰

去林菊櫻井上津幡野尻川と石黒又流れ
蒸り一葉蔵会又宮篁の尊をはしめとして
又千余騎にて誠おも失井深をそかこれ
今る失井城そとより究竟城なれは南ハ
蓮地中山をにほふ水海ふのちし臨津海津
あさつま乃泡ありにはニ水ハ海津抽尾山東
還戸会と一也東ハり屋る山まふぶきこうし
乃志ろ猿まつてきこかり西ハ能義誠海山ハ

流くうら見らりく東地なるりふかくわ
うり盤石と清らく山さらく之上らく四方峯
を流り猿の里者き限小陰居歩一志深
やや山をうしろよしてゆをまへよあれ安眠
志あひ城らくむおお東よりにし入大さなる
山海あられいそうり大きなるいえ在をかさ
猿く志らみをり浪く水をせき洗くみなかり
あるらこまつこ志ふ宿をうろく南小志こさうし

あはれなりし水のおもてたるゝふみにけり
て水海底にしづけるもなかうしてあはれ
なりして濁濤より浪西日をさしかゝりては
して陰陽よりかゝりけれとかねなりては
極りてと屋形屋形をなさりけり
四月廿七日平家の軍兵出羽城より帰洛
ましけり楼乃わりさりいのよしてかはせし
ともかんなりけるに兵十万余騎の勢むかへ

乃山に宿していさつゝに日をかさねけるほとり
源氏の大将軍安明威儀師平家の勢十
万余騎に及なりかゝれしとやたかひあん
ならす池にみへけるこゝろわりくいつ陳を
うちまさ勝なるかるとゆ城のうちより
平家のかたへかゝる矢を一いかけりかくし
とおもひしくよりてみれは中にむすひたる
ふみありこれをとりてかんきにて城のうちへ

よもと風もともくにかりける所ハのこさ
まぬ町ありけり出さく河れることに大さなる恵
ねぢ木ありかの木葉はまさわりぞれなせ
とつふその世代にかりくだしへ由若えぞ
わそ見しくる谷あり谷のまよ二三町ありけり
由若えた二河道ありてまなるみちハ城
ぢいまへおりしてかせてなるみちハうしろへとまき
うり此道を攀ぢうしろへおりしまをくいくさ

乃海を流ありしまへ陣たて忠をまもくなるハ
攀よ先浅けれ非風し然ハ水へ乃ことおちけ
ろんもるなて乃海太子を浦しわか帰く津よ
見りこ先さくうら給へ又河ハ山かの浅を記お
あくくハ河老りへおしうろせまりして志ら
ミせみりを見しけり水ハ浪となくおち出へし
安明ヶ一意め千余騎して攀乃うしろへ
おち出風しそしるこ記かとこくく乃月ミれ

よわきもちし給ふかいりて御うらみまいりけるは
いとしくそ外戚よつゝしくましけりけれは
越中次郎兵衛よとそおほせけり召平家
名筆共こまとものゝこまへはゆるりけれは
ゐくいりんとおもひしも事のていさし
わりなんとおもひしはまた共百余騎を
とりひく流かりしけり状よりてすこし様よ
まゐせらくおもひ中あれはかさまし御座本

ありせありうち入てけんけいせいはあふみけれ
なをぬまさりけりうちこゑてけんまん岩
ありたありめそなるたをゆるへありんのを
く徐のうしろへそおつる又おしものとく
しかうをこそりおとし給へおりてしを
けんせ流る水を座り出もふちのふとし先や
かこまひ流くるひく勝をもしそろへく
しゆきをてのへらく時を流る座して城乃う

ちより舟をいたしてこまをみくかさねて
ようら入て舟をうけとりとて城の内よこ
りけるこのとくおりてさつほとの運おくら
しと本宮をかこさ山へそまし八おち万於
平家の大将をうしなひ備中よりこ浅く
うてしは兼ハ源氏の大将軍兵とも一之次
うこまよりかり安明をりて平家のうしり
おちく八里しく小陸かまおんまいしやハ安

明より勝瀬へとそよせける源氏の軍兵六
千騎をおいはおとされくかの者西へおもむきり
そこさ安宮居たしとかさくけ清ありて平
家の大将陣備中水嶋渡又千余騎にて
安宮のみなとへうち入てさをやくと下知
しけく家おとしとわたりてれ船
すんちう人とをれ太郎備中国住人文陽太郎
二人を勝りよりて一人もかみかね

よいそわきのとて河中へおちかさなり
てこそひたりとせんとせしは越中前司
盛俊かえな川矢にそひの孫いさゝく河
中にまかりけれはまにおちにけり丈清をも
うち殺とそうしろへいはをまたく河中に
おちくるりたるをみたまひて殿上人へよてかくまつりあ
くわりしる河をこさにおこさせ残はいくつふ
同ハかりそくてつ死たりけりはやきをいまはちら

およ後かゝる死ハせてまちうつさは人ゑよ
かなまいらせぬりんよりハ御らんしぬてあ
西よりかへりて女房よ九をまいらせんといふ
公達も一門殿原をも千余人うしなはれ
まりていくてかねゆく国みえうくほと
の人殿原くるしみはかく唐女わすれらいまハいまて
もなかりハきんちやうんまてふときやうやうなる
そわきさまかしくゆふそてあはれつよりそく

されはそこ一門の者とも千余人ふせきしも
いそたりし所々ハ平家の大将てもなく
りしき事少へなく越中前司へそ心をかけける
大将ハ宿所へかへりさへかくされまてくらし
とつむく醫療するほとにこれは療治まかせし
く大日とかふに藤しやかてかしこくそ頼
とりくさりける
さるほとに平家越中前司盛俊か一萬余

千余騎まて加賀国と越中の境なる
檀あら宗親林六郎光明一城にこもり待
城のうしろへ廻りまへ四面はなりて
やうしろハ大竹たけくして巌石せ上の
うへに矢庫を構のふられたりけるまゝて下
まへハ一つもなく石ゆゑとまりて河あ
流れ鎧おそひこてゝ寄とも一きもかゝるへう
さるかりへなり平家の勢越中前司盛

後藤将監家高か子金丸にてかしこきさ
きとしも大方ぬつ匣文庫しまかりし城
出内に八出ありにま狩くいつかしてまへ
ことさしる愛に秋に入く安明威儀師か
そうりこうに野にいくらもまかりくだし
ともさとりあけめてあい松に出てありして
うしれ池のふゆいけ弟く女千金沢城に
戸口出上のさへむかくさ花おもてりう

しろにハとりと海を流れりこ車弟をん
牛ハちん出上へえし里むふかさ池まて
に秋うらによ帰かまとこうえくいう
池石中をさこりえかうらるまえてりさう
になりつハ老まける匣をさこうふあひさ牛と
もうしら着出れ轡さてといひ石中をまふ
におとろこそえしまで海つるわるいハ城り
むかひて角をさうこふあくえしまへあかひハ

ふち田によりかへりてかの紀粗もかり文らし
こゝろさしもかりうしれさゝまてに祥なれ
うくおしめくまふ平家へ入くさかられ八
林菊楷志らしまていひけるとも多く
かよく次みなおひおとされよりむかし
齊燕両国のいくさありけるに田単といふ
もの齊王の将軍としてありけるか燕王より
齊をうちんとするに田単文子余以のらし

をまうけて萬疋こそく錦の文をきせ
劔をとうしれ角のにゆいつけ葦をつけ
くゝりて尾にゆひつけてあふらを灑て火
をつけて城内より燕の将軍の陣へおひ入
はなちけれは牛走かけりのきのきに入けれ
はとよりつきてかふ牛尾の火燃あかり
ける時燕の兵これをみるに龍文にて剣
怖しけるうしとも尾の火にあれまくに

定まして軍旅中にありし事さはく
はとふわたる人たみかにの紋りたり
つれて志るくなり陣中には鼓をうち
うゑをうちおわ尾剣て忠天地を寧めたり
蔵き兵大に感まく齊延からになり
安明その事を思ひうして義男の謀乃
ほとをあらしけるとて申しけれ
林六郎光明城をハおとしされとかりこ

ありてありけるかたや馬をとりて本国に
ひよし流布してけりけれたこまてとりてま
着大におとろきさくらはてゝかけるとこに
子孫清水冠者おなく四人ありけ力おもと
く十余露主として八幡余名主として三家
又高家の女子あり十とへ八とをとひよ物
くにさもひけるハそのまてうハ十四又とくこ
よわとひな八たらくゑ妻子ようく縁くして

乃ある色なれともおさなけれはとくもれ
を清水冠者をハ人質に鎌倉へわたされけれハ一
あまりハ一八なるなしとて物をかりそ
うけるをも世をとりやとおもふともまち
かくれも小陸より色ハ二月三月より八
まちし風て京へ上られハ一二まゐ
あんもんをのかと乃くきくなきく
あれよ浅孫よ八幡をして八幡へまいりて

いろまを揚よ風もなくさきよなをしひ
くえ余族を引率して乃かるこまさい
こそあり来るともおちよりて人ゝハい
よりてかうし乞のもまお既山を上く
砺波山へあひけるかりうんきわ待はて
願書をかきて白山へ奉る彼願書云

立申大願事 三ヶ条以前申馬長

一可奉勤仕加賀馬場白山本宮文於講事

一可令勤仕越前馬場平泉寺本論事
一可令勤仕美濃馬場長瀧寺本論事
右白山妙理権現者観音薩埵之垂跡自去
養老之比化現世卜三州為顧之霊利四海
率土為卑泰諸眷尊安満二世之悉地海泳
依況教誇一生之受耀想能護要交之霊社
天下無双之霊神若欲而自今以来争交
也不当之為從能誇非巡之業爵不顧如十

奉万乗之聖主陵辱三台九棘之臣下或
追捕太上法皇之仙洞或押取摂政殿下之身
或奉囲親王之仙居或奪取諸家之摂録又
凌七道何変不然之百官万民誰人不歎已
欲断王孫置非納家之御敵也一之才次焼南
京七寺之仏閣断東漸八宗之恵命尽園城
三井之法水滅智証一門之学侶其逆勝調達
之悪越波旬月支大天乗逆欲同域守屋之

來歟已塵滅佛像經巻亦燒拂堂塔僧坊寧
非法家惡敵哉二是ナ次源平兩家自昔至于
今如牛角天子左右之守護朝家方後之將
軍也而觸事決雌雄凋源致鋒楯代々合
戰度々諍勝負已至當世之惡逆極之大
敵歟三是ナ因茲叡嶽神明神道之冥助爲降
伏佛法王法之惡敵之大將於三州馬場御
感應於三所權現非時先代伏王敵皆佛

神顯負於國降謀叛寧量權現之勝利哉
加之白山本地觀音大士者於御畏急難之
中能施無畏雖平家軍兵如雲集如霞下流
惡悉退散之金言也湯縱雖誅伐而流如咒
咀致惡念還着於本人之誓約量難免還
念權現本誓感應者可廻運何況我家自先
祖御八幡大菩薩之加護振威德而八幡
本地者觀音本師阿彌陀也白山所拜彌陀

勝士観世音也如才台力者感応潜通者欲況
弥陀丢無量寿之号置不換子狀万歳之
舎利観音現薬王之身導不食不老不死
之業乎云本地云垂迹勝利掲焉也付公付
私欲遂素懐所発無私奉公主須倫為渾主
欲為当天下息為興仏法為仰神明済国天
神無怒役嫌不慈地祇無崇唯獣逆矢不以
無滅奉王位是不慈之至欲誅尽滅仏法亦

逆悪之甚也同月末際地呈着然天神明為
神明者此毋施験三宝為三宝者此毋壊滅
仏法擁護現世我等之怨讎宜令罸平家之族
我為蒙擁護加力顕欲討誅殺之岸岳剏丹
祈感応速通者之件大形無懈怠可果遂也
而者弥悦源氏西国新添社壇之荘厳法儀
非只之冥加信致仏法之興隆矣仍所立申
如件敬白

寿永二年四月日　源義仲敬白
とぞかきたりければ又月二日林六郎光明
并富樫太郎入城郭二ヶ所をうち落しつ
近く源平互にせめ入しか友兵共ことくなりて
や馬をへてそく中に道を飛猶にハ新氣なり
平家ハ白山寺一揆をたのミてぞこもりける
十一日に平家十万余騎の兵共を二手より
わかく三万余騎をハ志雄の山にむかはく
さて残りし七万余騎をハ大手へむかはく
越中前司盛俊ら一萬五千余騎ひきさら当
て加賀国をうち過て礪浪山をこえて
中黒坂猿か馬場にぢんとりて有そ寿
をさて又万余騎をかたらひて越中国へ
たるをこえて池原般若野にて陣とり居
大将越中国住人に木曽に付中小文
治太郎ハ安宅れみなとのいくさに向ハを

といふこと後京極殿の御をおほせあり
たゝし義仲殿へ参らく文縁まても いふこ
かりけるに作目ともふまほいふ然うしも
ちるまろいふこと木曽殿へまいりへ参る
えた木曽にも源氏をかへし給ふ天と
男もそれを統合せ二もたれいのちをすて
まうぬく大事此をおいてすてまうと思ひへ
りけるん人乃まことの忠りて又まろいふこと

いて給ふるそいともつし乃様申んしと給
ねくさハ殿原様乃のむろよし仲ハ小縁
なり平家ハ大縁とこさに極かりそくはなら
ねくかくさ様らんあるそ此の忠おもない
しかとハ殿原にてそわかんあるそうんとの
いくさまかくおそ縁りかく縁しうて殿原君
そうらひそとのことまひ給ひハ文殊ちか
給ふまことに君葉門ハいかてよつく

山道二れ碓氷山ハ三乃坂なり小
黒坂中黒坂西黒坂とて三ツ平家のかた陣
所中黒坂ハ猿か馬場より北へ行也
後陣ハ大野今湊井家津幡竹橋なんとに宿
して山也中ハれ山ハ也いくそ山をんよ北
つきけりし西黒坂志ほりめてハ楯六郎
を先手搦手勢まて行まつて鷲か鳴
うちわたりて志保山へのぼる所中黒

坂志大将軍ハ根井小弥太搦手を将て
須料地庭をまいりく志保山へうちあハ
さよ小黒坂れ大将ハ樋口とて義女子
搦手勢まて安楽寺を越く志保山へを
しよ弓ぞよ三手より一手よなりて一せん
くるなりけれ共先ハまさきんえ
し平家後陣搦手勢つかく襲小屋を
ちかくうしろへ見へ山ハ志ゆきさいえ

もおんを尽く源氏君のかゆまゐりた
まと山へくわつくなかう俣をわつとおもえん
まんその俣まて思ひこゝえ如くへきこん
そのときかゆめ八めてましよゝりとおもう源
氏くこまよりの大勢そ蹴とまらすかく八
ありよ八いくまへ武殿よ八かゆめわりよ
くるまさなくて南乃大谷へおちかさなる
おちのりんもこん矢一いもとしてほろひけん

ほるそと中ゞり本宮をこえて おう
おもしろや弓矢とりの謀ハかくそとよ手
家の子郎等君勢わりとも皆たそかれん
するなる原とて文場のかはうへよつゝく
かゝめてそそまいりける楯六郎親忠千
騎勢にて南黒坂をうちめぐりて深勤山へ
そ上今井根井小弥太千騎勢にて中黒坂
を北延倶利延羅を延くこまとも深勤山へ

ろよりける輪絵も千縁縁まて小黒坂を
こらまいり安京ちを跡く源勤山へうさ
しあかるける目とふ本尊成八かうやま
をまいりて後本尊乃さまし乃日八年歳れ
大まもてよ硯波山をこら跡く黒坂柳京
へうらおとさこゆきく神大縁也柳京れ
むろく弁出ける栂なから八池遠れら月もん
まそおりへし池台もん月もん八縁れ毎女

まよるまなき八大縁もんりさまら弟ろまて
あしさこしりやあらん出ろんかうされを山
まこめく目をちらして乃ちらりかれら
岩れ巌石よむ弟くおいおもらんとお女
そのさなきそよし神えいそ跡く黒坂に
よ陸をとろ色し額まてよむらひかりと云八
此山の方巌石也云尼衣かるされよもよ縁
しいさるのあし風もめんとてめよ下衣ら

従平家君達陣山をこえしとてたゝさうし
一人つゝ紀るよりさそく只今のこ魚あれあらし
乃ふりとなる大王林君高本君はかまへ
らたゝ一かまへゆかしとてうりあんのとく
平家にまへをみんとくありや源氏の先陣むかひ
うりとて敵におんの内しやなりをのくハを
兼内せさうなく打わらへ打むかく四方より
ゆあしてそらまへくあしりなん鉢山八四方

菱石の敵をたなまを川ともみへしを馬乃
草をひ水たん女よりきりより紀而の山を
ゆりきく馬たん済をよりりへるましりお
まくとりく倶むわやしてて砥波山よおり
ゆりて猿かるの場まて陣をとれ木曽殿
八平家の山を焼けさ紀よとてつよ紀る
をうさえりくとり乃きく十二騎をあ
ゆま場かとうを川あらせ川まて砥波山

のむしろふかきよ地つき然四方浅くこ也
見ゆ。いそよ一村もん家あり夜山居みと
里の本居よりあなあれ玉うきはのみえ
くうこ為流きりれ而しろありまへりハ
多居ろ立よなる池とのおさびしくわ
礼ハなん居定とやそいふる神在あの
先こそまいり里とるそと聞くまへ来出
八埴生社とやうく八幡大なさりせいる

さてまいれる当国新八幡宮と申
といふ寺あり八本宮と善くおもひく
手向よ大文房覚明と云者ありあれ
せとひくいふ若れと義仲さいはひよ当
国新八幡宮の御宝前にまち出
さてまいりてかねさんなしとあんとすこ
んとのいくさまハうこうひなくかち也
おわ内おそられよりて八旦ハ後代も

これ上八幡御宝殿也　願書也一筆
かきて進らせやとおほせけれは覚文
といふれ覚明を召して書かせらる
箙たん中より小硯をとり出して帖紙を
なをしひろあけかくかくめいその日褐衣の
よろいきてゝまよ首丁頭巾してやみな
ゑわのまろいよくろつゝその矢をひくみ
銅つくりの太刀帯して一寸長なるまぬ

甲ニ方及巻出脚よせさせて書けり人
まつねみさまくかきてけりわれ文武
二道達者とぞみえたりける其状云
歸命頂礼八幡大菩薩者日域朝廷之本主
累世明君之曩祖也為護寶祚為利蒼生顯
三身之金容開三所之權扉爰頃年之間有平
相國云者管領四海而令惱亂萬民是既佛法
讎王法敵也義仲苟生弓馬家僅繼其箕裘

見彼暴悪不能顧思慮任運於天道投身於
国家試起義兵欲退凶器而闘戦雖合両ヶ
陣士卒未得一致勇之間区々恐之処今於
一陣揚旗之戦場忽拝三所和光社壇機感
之純熟既明也凶徒誅戮無疑歓喜降渇
仰銘肝就中曽祖父前陸奥守義家朝臣
附身於宗廟之氏族号名於八幡太郎以降
為其門葉者莫不帰敬義仲為其後胤傾首

年久矣今発大功従以嬰児蠡測巨海蟷螂
取斧如向隆車然而為君為国発之志也非
鑒在瞻恃哉悦哉伏願冥顕加威霊神合力
決勝於一時退離於四方然則丹祈叶冥慮
照之加護先令見一瑞於給敬白

寿永二年六月一日　源義仲敬白

とてかぶらり抜此願書と共三表矢を
納さてわめのやりけるよみ奉らさ給ふ

かゝる巻みろくちくまからしめこ拂く
其の御屋ゟ大菩薩社壇へおさま
りそれより源家は特に八幡大ほさつを
二なく仰ぎしにや鷺飛ひん山鳩天より
とひきたりて白らされ上に居んまん
そもし神馬より二羽ゟかくろふ我
此時首を地につけてこまこを拂ふそれ
源家の軍兵ハなるかふこまこを遊ばして身れ

毛をらくろみ尾をなるさかほとに木曽
ゟ鏡三千余騎にて地末がこ拂り鏡の
がきをけんとく八わしらりなんとく松を柳
原よ家泥くゝをとはりわりて八千余騎
とハうりわりて八一萬余騎三万余騎九騎
を四又度十度までそん騎つなよりるみ千柳原
よ破さくくをも平家礪波山そんにこりかゝう
うけきへかりてよ松山をうしろはして小西

に陣をとる木曽ハ黒坂志水のやまに松
長柳原をうしろにして西むきに陣とる
両陣共あひさる川ハ只三丁ばかりへだてゝ
あくしそをつかひ入けり木曽ハ勝をま
ちえることかなハんを以てたゝ平家にこ
よりもさゝげて俱利三ヶ度合せくれ
ちハ志月まりて合りてその日の暮なく
おふしらひて源氏暮陣にのこし精兵十

人騎をつく乃かとて入ましまして大勢共
久しく国府に平家共陣へそいり平
家をうしろよりて大騎をいれあん
揚く大勢の源氏いぬいはて後方大
騎が日の出て暮ありて入せましめ
さらぬに御輿をめけれとたとへれとも
同よりせいしくま俱利伽羅へ谷又とかりかけ
て二千騎をおとし二千騎をいつしていふき

ゑ千騎を出せハ千騎をいたして百騎をい
たせハ百騎を出合てかくをいくさそさる
ゑうりかく両方勝負もせすしてよるになるをまち
へ都さきりそくかくよることきり落こ
くりみの陣もよく六十余度よ都の合戦
家は源氏落かかくなんまかりて同
をそうさんとするえうりとハさうもして安
まおひしらひく同をかへしりまこそん

かなはれさる陣とも見もなれりさうになりに
弟れに今井四郎兼平楯六郎親忠八嶋四
郎落合五郎をさきとして一万余騎の勢に
て平家の陣のうしろにしの山の上より
さしまはりて陣をとり御弟也
ゑ黒坂口柳原にひかへたる大将二万余騎
同所に陣をとつたる後陣万余騎かためたく
に忠皆をひかへしみ深によひきかへてし

年表ニ云小野山叢石也私事ハよくわらし
叔わかくうわんと申へしける事よ母
と作りなされけるハ東西をうしなひてかなしかりけるハ
てさらくうしろを山崎くして涙かりけり
うらみもせしハ其後しともおほえさりし處
といひし歸れたるおハ大にはなれかたきもの涙
うしろへも見きれさす為よわつ孫えて今日
乃刻もせ日ハもてよなき悲慕内ハしら涙ち

くらおよひ悲歎なれハいかにも面影ハも第
てろおとしけるさかりの叢石と風この私
よ進き記よしおらひたる君枕よ涙ながし
思ひうちこめてを記よくりおよおの打ち
ハ乃ちよおとはすこのよ寒進しぬ後よ涙
そのハいけおとてそのよ寒ころさるあと
と歸えるをおとはす子おとせえ文もつ食
重おとを往来もおらくさる見よ心人

人々は馬より上におちかさなりくたり
けるか谷一つをは平家の大勢にて埋みけれ
こそなれ谷のそこには大なる柳あり
一枚八十丈ばかりありあれかくれにて
うちかゝりけるまて世然なれ大将軍参
河守知度以下侍には越孫判官高橋
前諸司盛友ちん軍百六十人むねとの物
とも二千人はかりかの谷にてうせにけり

巌泉ちをなかし死骸岳をなせりされハ
かのくりからか谷には箭のあなかたな疵今よ
のこり枯骨谷にみちていまも世まてもあ
はれとそうけ給はりける末まてもかくて平家
の大勢からおとして倶利迦羅か坂に
あんまり向にまて枝つきてむかへる雲に平
家の池にくつれる谷あん中よりにわ
かよ矢は笑ひてわるゝ末代大りおとした

く府主を流かりてみ上かまに金銀なんど
此御寶殿まてうちわつて揚へまいらせ金銀
の文字ハ白山権現銀文字の御事也本宮
るまりおりふしも浅ましくて三度まいらし
うそまり悪く此いくさハよしにかゝりのち
のおもふ處ニおもはて白山権現の流れたち
ひもて平家兼務ハはらひハ弟ふよう
とく鉄の文ハいたくなわかりて收揚

誦御らん御院中さんとく鞍馬太之
目録也とひくらうけ白山えんぎに近
きをこれやもの神輿をハいろくなみあ
数度ふとて加賀国ハ林六郎光明か願
横取を白山権現に寄進しまてまゐる
いまよちつるを神領まてつりけるとかや